

令和元年6月18日現在

機関番号：37116

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20783

研究課題名(和文) 化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a treatment life support program for patients with advanced lung cancer who continue chemotherapy

研究代表者

萩原 智子 (HAGIWARA, Tomoko)

産業医科大学・産業保健学部・助教

研究者番号：20746549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活に焦点を当て、患者と看護師に対する調査をもとに、療養生活支援プログラムを開発することを目的に実施した。調査の結果より、化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活を支援するプログラムに含むべき内容として、セルフマネジメントを促進する支援を目標に、最新の肺がん化学療法の知識、AYA世代の肺がん患者が利用できるサポート内容に関する知識、がん医療を取り巻く社会保障制度、本調査で得られた治療段階別に出現する進行肺がん患者の療養生活上の困難に対する必要な看護支援を含むことが最低限必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活において、患者・看護師が困難と感じている内容が浮き彫りとなり、より支援体制として整備すべき問題とその対応について検討することが可能となった。また、本研究の特色としては、化学療法の治療段階に沿って進行肺がん患者の療養生活を支援するプログラムの開発に活用できる点である。特に、肺がん化学療法は、遺伝子変異の有無による治療選択など飛躍的に発展しており、看護も複雑化していることが考えられた。看護実践の切り口として、肺がん化学療法の治療段階に応じた看護プログラムが開発されることにより、患者QOLの維持・向上の支援につながる点に本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the treatment life of patients with advanced lung cancer who continued chemotherapy, and carried out to develop a treatment life support program based on surveys of patients and nurses. Based on the results of the survey, with the aim of supporting self-management promotion as content to be included in the program to support the treatment life of patients with advanced lung cancer continuing chemotherapy, the goal of supporting self-management is: Knowledge of the latest lung cancer chemotherapy, AYA generation lung cancer patients Knowledge about support contents that can be used, social security system surrounding cancer medical care, minimum necessary to include necessary nursing support for medical treatment life difficulties of patients with advanced lung cancer that appears at each treatment stage obtained in surveys It is suggested that it is necessary.

研究分野：臨床看護学

キーワード：肺がん 化学療法 療養生活 看護

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本における肺がん死亡率および罹患率は、喫煙者世代の高齢化に伴い増加傾向にあり、2013年の人口動態統計によると、がん死亡原因として男性は第1位、女性は第2位となっている。早期発見が難しいことから、発見時にはすでに進行している場合が多く、5年生存率も20%前後と低いため、治療困難な「難治がん」として総称されている。

進行肺がんの治療の中心は化学療法であり、近年、肺がん化学療法は、遺伝子変異の有無による治療選択、高齢者へも適応可能な抗がん剤レジメンなど飛躍的に発展し、医療者・患者ともに新たな治療のパラダイムに直面している(堀之内秀仁, 関根郁夫, 2009)。治療の場も外来や短期入院に移行しつつあり、予後が厳しいという厳然とした事実はあるながらも、化学療法を継続しながら療養生活を営む肺がん患者が増加することが予測される。特に短期入院や外来治療が増加している現在、患者は自宅で過ごす時間が多くなるため、化学療法による有害事象への対処行動のみならず、精神・社会的問題へも自ら対処していく力が求められる。先行研究においては、初回化学療法を受ける肺がん患者の治療前・治療中の対処行動について、「身体を良い状態に保つ」「気分転換を図る」など(網島ひづる他, 2004)が明らかにされており、化学療法と日常生活を両立させていくためには、苦痛症状を緩和し、心身の安寧を自ら得ていくことが重要であることが示唆されている。特に、手術不適應の進行肺がんの場合、患者は先の見えない闘病過程において、症状の変化、抗がん剤の変更や中断、治療効果を知る怖さ、身近な患者仲間の死、経済的問題など、日々の出来事から生じる様々な苦痛を抱えている(村木明美, 大西和子, 2006)。したがって、2次治療以降、長期的に化学療法を受ける患者は、新たな薬剤の副作用や原発病巣・転移巣による症状など二次的障害の出現および増悪だけでなく、治療が無効というバッドニュースの体験を重ねながら、身体的・精神的にも消耗することが予測される。このような現状にある患者に対して、医療者は、化学療法を継続しながら生活する肺がん患者の療養生活の実態を捉え、治療と日常生活が両立できるように支援するとともに療養環境を整備していくことが必要と考える。しかし、肺がんの5年生存率が低いことが影響しているためか、2次治療以降の化学療法を継続する肺がん患者を対象とした報告はほとんど見当たらず、初回化学療法を受ける肺がん患者に関しても、具体的な看護支援プログラムは明らかにされていない現状があった。

本研究代表者は、2次治療以降の化学療法を受ける手術不適應の進行肺がん患者を対象に、化学療法と日常生活の折り合いをどのようにつけながら生活しているのかについて、インタビュー調査を行い、質的帰納的に分析した。その結果、進行肺がん患者は、療養生活において、『化学療法や肺がんによる心身への影響に対処する』、『化学療法過程にある自己の理解に努めて治療に参画する』、『周囲の人々とのつながりを維持してソーシャルサポートを得る』、『治療を継続することに肯定的価値を見出す』、『自己に備わる力を駆使する』、『自分らしい生き方を再構築する』ことが明らかになった。これは、進行肺がん患者が『化学療法や肺がんによる心身への影響に対処する』という生命を支える取り組みを基盤とし、自らの価値観・信念・生き方を取り込みながら自分らしく生きることを実現しようとしていることを示唆している。またこの結果より、薬剤変更に伴う二次的障害の出現程度や肺がんそのものの病状変化のスピードなど治療段階を考慮した継続研究を行い、治療段階別の特性を踏まえた具体的な看護支援について検討していく必要があると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、化学療法を継続する進行肺がん患者を対象に(1)治療や療養生活における困難と対処、(2)療養生活における支援の要望、看護師を対象に(3)患者を支援する中での困難や支援内容(4)患者支援として整備すべき事柄を治療段階別に明らかにし、化学療法の治療段階に沿って進行肺がん患者の療養生活を支援するプログラムの開発を検討することである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 化学療法を継続する進行肺がん患者を対象とした調査

##### 研究対象者

対象者は、1)~5)の適格要件を満たすと主治医が判断し、研究参加の同意を得られた者とした。1)肺がんと診断され、病名告知を受けている。2)県内のがん診療拠点病院に化学療法を目的に通院または短期入院中である。3)手術不適應で初回治療、2次治療、3次治療の何れかの化学療法を受けている。4)30分~60分程度の面接が可能な精神・身体状態である。5)言語的コミュニケーションが可能である。

##### 調査方法

治療や療養生活における困難と対処、療養生活における支援の要望に関する半構成的なインタビューガイドを作成し、面接調査を実施した。

##### データ分析方法

逐語録を精読し、化学療法や療養生活における困難、対処行動を分析の視点として質的帰納的分析を行った。

#### (2) 化学療法を受ける進行肺がん患者のケアを実践する看護師を対象とした調査

#### 研究対象者

対象者は、1) ~ 2) の適格要件を満たし、研究参加の同意を得られた看護師とした。1) 県内のがん診療拠点病院に勤務している 2) 肺がん患者へのケアに3年以上従事する。

#### 調査方法

患者を支援する中でのそれぞれの治療段階における困難や支援内容、患者支援として整備すべき事柄に関する半構成的なインタビューガイドを作成し、面接調査を実施した。

#### データ分析方法

逐語録を精読し、分析の視点は、患者を支援する中での困難や支援内容、患者支援として整備すべき事柄とし、その内容を治療段階別に質的帰納的に分析を行った。

### (3) 化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活支援プログラムの開発の検討

#### 方法

調査(1)(2)で得られた結果を参考にして、プログラムに含むべき内容を検討し、プログラム開発の示唆を得る。

### (4) 倫理的配慮

本研究は、所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した(H28-059号)。対象者には、研究目的、研究方法、自由意思に基づく参加であること、個人情報保護等について文書と口頭で説明を行い、書面にて同意を得た。

## 4. 研究成果

### (1) 化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活における困難と対処および要望

#### 研究対象者の概要

対象者は15名(男性13名、女性2名)で、治療段階別に1次治療6名、2次治療5名、3次治療4名から協力を得た。平均年齢は69.5歳(SD=6.8)であった。

#### 化学療法を継続する進行肺がん患者における治療段階別の困難と対処および要望

1次治療における身体的困難は、【肺がんに伴う身体症状】である咳嗽・疼痛や【化学療法の有害事象】である倦怠感、食欲不振に伴う体重減少、などであった。精神的困難は、【喫煙に対する葛藤】、【予後への不安】、【周囲から治療への理解が得られない】が明らかになった。対処は、【有害事象への対処】として、これまでの日常生活では意識の薄かった感染予防対策に積極的に取り組むことや、食欲不振に対してはいつなら食べられるか、どのくらいの量なら可能かと模索しながら食事を摂る工夫をしていた。【自分の病状を把握する】では、診断されたときにはすでにステージ であることを認識し、治療に臨むことでこの先の病気の進行や身体の変化について自分なりに予測をしながら生きていくことに役立っていた。

2次治療における身体的困難は、【化学療法の有害事象】として倦怠感、1次治療時よりも体力の低下がある、1次治療時から継続する末梢神経障害、皮膚障害などであった。精神的困難は、【就労との両立に見通しが立たない】、【見通しの立たない治療継続への不安】、【腫瘍縮小効果に対する不安】があった。【同病者に対する声かけへの気兼ね】は、療養生活上の精神面の対処のひとつとなっている【同室となった患者との交流】で気分転換する一方で、患者それぞれに出現状況が異なる有害事象の程度や病状進行に伴う身体・精神的苦痛にどのように声をかけてよいのか迷ってしまうという発言がみられた。その他の対処行動としては、化学療法による心身への影響のタイミングを理解し【自分のペースで生活する】ことができていた。また要望は、【社会保障に関する情報提供】として、休職期間中の制度上の疑問や金銭的問題についてであった。

3次治療における身体的困難は、【化学療法の有害事象】である味覚異常、食欲不振に伴う体重減少、体力低下、1次治療から継続する末梢神経障害もあった。精神的困難は、【同病者の死】においては治療を繰り返し入院することでこれまで共に治療を継続していた仲間の死を感じるものがあげられた。対処は、【自ら体力維持に努める】では入院中でもできる運動を積極的に取り入れたり、【医師との良好な信頼関係を支えにする】では治療選択や治療の影響などについて医師に気軽に質問ができる関係性を築くことで治療を繰り返すなかでも支えとしていた。また、1次治療では自分が希望する食べやすい食事形態や入院生活上の希望など自ら申し出ることができなかつたが、治療ラインが進むごとに【自分の希望や疑問を看護師に申し出る】ことができるようになっていた。さらに、治療を繰り返す療養生活が長くなる一方で、【家族との時間を可能な限りもつ】ではスケジュールを調整しながら旅行をするなど家族との時間を過ごしていた。

各治療段階の特徴として、患者が感じている身体的困難は、【化学療法の有害事象】が主として明らかになり、精神的困難は、治療段階が上がるほどに治療を同時期に開始した同病者の死により自らの予後を現実的なものとして感じている傾向があった。また、2次治療においては、これまでの自己の治療経験をもとに同病者を気に掛けながらも自分との体験が違うかもしれないことへの迷いが生じていることも明らかになった。対処としては、治療段階が上がるほどに化学療法を長期に継続していくための体力維持の重要性を感じ自分自身の生活の中に取り込んだり、医療者に自分自身の意思や希望を伝えていく力が強く

なる特性が明らかになった。

(2) 化学療法を継続する進行肺がん患者に関わる看護師の困難と支援内容、患者支援として整備すべき事柄

研究対象者の概要

対象者は看護師6名で、肺がん看護経験年数は4年(SD=0.58)であった。勤務場所は全員呼吸器内科病棟であった。

化学療法を継続する進行肺がん患者に関わる看護師の困難と支援内容、患者支援として整備すべき事柄

化学療法を継続する進行肺がん患者に関わる看護師の困難として、1次治療では【告知後の受容段階に配慮した介入】、【未告知や転移等については告知していない患者への対応】、【不安が強い患者への介入】といったがん告知に伴う精神状況の把握とその介入に関する困難があった。支援内容としては【副作用がイメージつきやすいように丁寧に説明する】、【患者の気持ちや疑問を丁寧に聞く】など、化学療法に伴う有害事象への説明について、薬剤師や医師の説明に加え、患者の1次治療の進捗状況に応じて声掛けをしながら説明を行っていた。2次治療・3次治療については、治療段階に明確な区切りをもった困難についての語りは少なく、薬剤変更を行い長期に化学療法を継続している患者に対する困難としての語りが多かった。困難の内容としては【退院中の喫煙行動に対する教育的介入】、【同病者の死や状態悪化に対する質問への対応】、【AYA世代の患者の療養生活支援体制】、【経験年数の浅い看護師の病状進行した患者に対する退院支援の認識不足】、【病状進行と治療継続に関する疑問】、【緩和ケアチームへの依頼のタイミング】、【化学療法中の安全確保】であった。【化学療法中の安全確保】については、患者自身が化学療法の実施に慣れを感じ、これまでの治療の中で特に問題が生じなかった場合、点滴ルート安全性を確保すること等への看護介入に理解を得ることに困難を生じていた。支援内容としては、【新たな薬剤の特徴に沿った副作用の説明】、【肺がんに伴う苦痛症状への観察や看護介入の強化】があげられた。患者支援として整備すべき事柄としては、【AYA世代の患者の療養支援制度の整備】、【経口抗がん剤による皮膚障害へのセルフマネジメント支援】があげられ、特に後者については退院支援の課題と考えられていた。

看護師が感じている困難の特徴として、1次治療についてはがん告知から化学療法導入までの期間が総じて短期間であることや外来で告知されている状況で初めて接する患者のため、患者の精神状況にフィットした対応ができていないのかという点で困難を感じていることが考えられた。看護介入としては初回治療という特徴を捉え、患者が安心して治療に臨むことができるように一つ一つ丁寧に、かつイメージできるように説明がされていたため、患者の精神状況を捉えながらどのようにアプローチするのかが、手術の適応がなく難治がんとされる進行肺がんへの初回治療の教育介入の課題と考えられた。一方で、2次治療以降の薬剤については「薬剤変更」という患者にとってのバッドニュースに関する具体的な支援内容の語りより、新たな薬剤における追加説明という方法がとられており、1次治療から継続する有害事象や有害事象による生活への影響についての語りはほとんどなかったが、2次治療以降、肺がんそのものの進行に伴う疼痛や呼吸状態の悪化等の症状観察は強化していることがわかった。

(3) 化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活支援プログラム案に含むべき内容

これまでの調査結果より、近年、肺がん化学療法を取り巻く状況は発展しており、遺伝子変異の有無により、分子標的治療薬を初回治療で投与することや免疫チェックポイント阻害剤の導入など複雑化しているため、看護師自身の肺がん化学療法に関する知識の獲得状況も結果に影響していることが考えられた。

化学療法を継続する進行肺がん患者の療養生活支援プログラムに含むべき内容として、セルフマネジメントを促進する支援の構築を目標に、最新の肺がん化学療法の知識、AYA世代の肺がん患者が利用できるサポート内容に関する知識、がん医療を取り巻く社会保障制度、本調査で得られた治療段階別に出現する進行肺がん患者の療養生活上の困難に対する必要な看護支援内容が最低限必要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

Tomoko Hagiwara : Difficulties with Medical Treatment Lives of Advanced Lung Cancer Patients Receiving First-line Chemotherapy , 21st International Conference on Oncology Nursing Practice and Cancer Care , 2019.3 , 2019年3月21日~22日 , Prague (Czech)

Tomoko Hagiwara, Keiko Tsuji : Difficulties and Coping with Medical Treatment Lives of Advanced Lung Cancer Patients Receiving Third-line Chemotherapy, 30th World Congress on Advanced Nursing Practice, 2017.9 ,2017年9月4日~6日 ,

Edinburgh (Scotland)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。